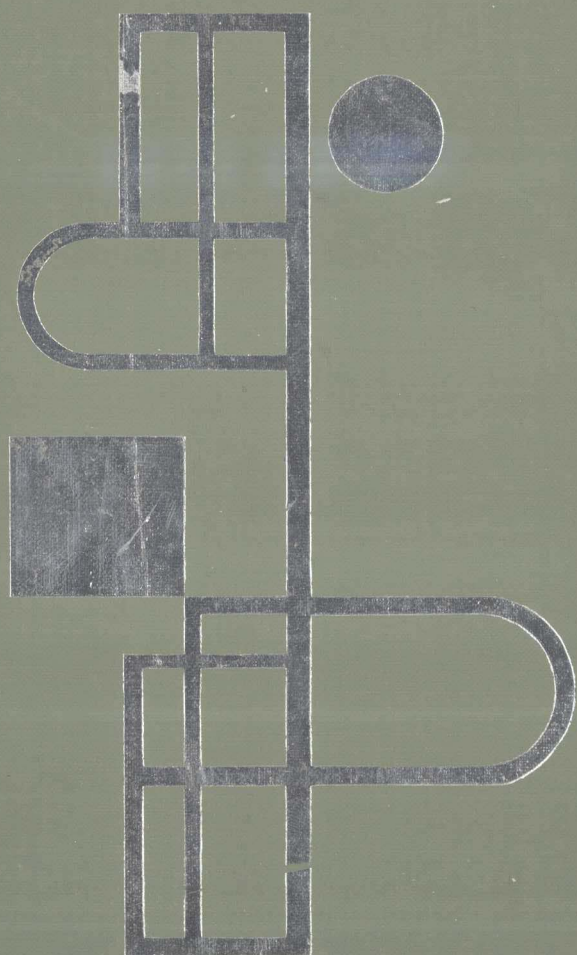
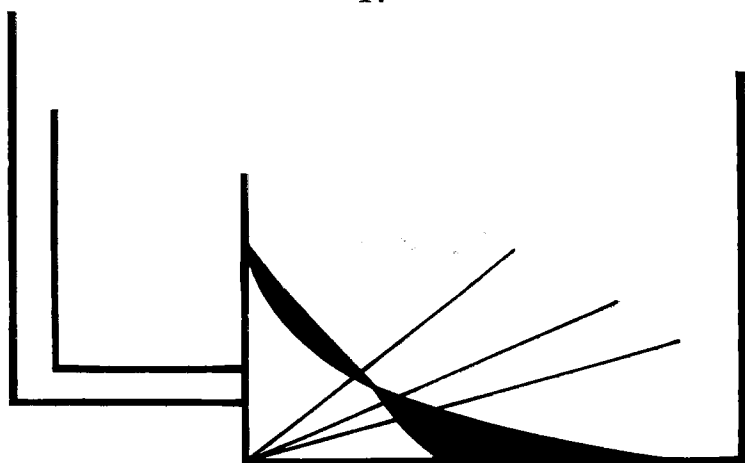




圓地文子 集

新選 現代日本文學全集

17



筑 摩 書 房 版



田 地 文 子 集

昭和三十四年十一月十五日 発行

著 者 田 地 文 子

発行者 古 田 晁
東京都千代田区神田小川町二ノ八

印刷者 山 田 一 雄
東京都青梅市根ヶ布三八五

発行所 筑 摩 書 房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

〔電話〕東京二九局(七六五一(代表))
振替 東京 一六五七六八

製 版 整 刷 印 刷
株式会社 株式会社 株式会社
精興社 精興社 矢島製本

円地文子集 目次

女坂	五
秋のめざめ	九
女面	一七
廃園	一八
光明皇后の絵	二五
愛妾二代	二六
あの家	二四
吉原の話	二八
浜木綿	二九
ひもじい月日	二七
紙魚のゆめ	三〇
黝い紫陽花	三七
男のほね	三〇

琴爪の箱	三六
二世の縁拾遺	三四
妻の書きおき	三五
耳環珞	三二
髪	三七
高野山	三二
二枚絵姿	三八
東京の土	三五
冬紅葉	四七
無慙の美	四六
解説	四三

装幀 恩地孝四郎
恩地邦郎

圓地文子集

第一章

初花

初夏の午後であつた。

浅草花川戸の隅田川を背にした久須美の家では母親のきんが朝からかかつて念入りに掃除した二階の二間つづきの部屋の床に庭の白い鉄仙の蔓花を入れて、やれやれこれですんだというように片手に腰をたたきながらくらしい梯子段を降りて来た。

玄関の隣の三畳の連子窓の下で川から来る明るい水明りに針の目をすかせて、仕立ものの縫糸をとおしていた娘のしは、花畳紙を持つて部屋へ入つて来た母親に声をかけた。

「今、お隣のボンボン（時計）が三時を打つてよ……お客さん、晚いねえ、おつ母さん」「おや、もうそうなるかい。……どうで宇都宮

から乗りつぎの人力車だというから、昼すぎといつても、夕方にはなろうよ……」

きんは茶の間の長火鉢の前に坐つて長目の羅宇の煙管に火をつけた。

「朝から精出したから、くたびれたでしよ。おつ母さん」

としはにつと笑つて少しほつれた銀杏返しの鬘にほそ縫針をすいすいとおしてから、縮台の赤い針坊主にさした。それから膝の上の浜縮緬らしい仕立物をそつと畳紙の上に移して、悪い足をひいて母親のそばへ出た。自分も一休みと思つたのである。

「毎日掃除をしていてもよく塵埃がたまるもんだねえ」

きんはたすきをとつた袖口をびんとおぼして黒襦子の衿のほこりを潔癖らしく手ではたきながらいう。踏台にのつて欄間から鴨居の長押の溝までさつぱり塵埃を拭きとつたのが、娘には言わないが自慢なのである。

「白川さんの奥さんは、何だつて、東京へ出てみえるんだらうね」

としは掃除には母親ほど興味がないらしく、針仕事につかれた眼のまわりを指先きでもみながらいうのだつた。

「何つたつて、お前……」

きんは不審そうに眉をよせて娘をみた。気の若い母親と病身で婚期を過してしまつた娘は今では親子というより姉妹のようなつながり合ひものごとを話しあうのだつたが、時々としの

方がきんより年寄じみた考え方をした。

「東京見物だつて手紙に書いてあつたじやないか……」

「そうかしら」

としは仔細らしく首を傾けていつた。

「あの御新造……暢気に東京見物なんぞに出て見えるかしら……白川さんは、大書記官とかつて、県庁じゃ県令さんのすぐ下なんでしよ」

「そうだよ。大した羽振だつて話だ」

きんはとんとん火鉢の縁で煙管をはたきながらいつた。

「出世したもんだよね。前に東京府のお勤めで隣にいた時分にやあんなになる人とは思わなかつた……もつとも、その時分から、きれる人じやあつたけれどね」

「だからさ、おつ母さん」

としは母親の肩をたたくような声でいうのだつた。

「その忙しい旦那を残して、お嬢さんと女中をつれて一、二か月がかりの東京見物なんて、何だかあんまり悠長でおかしいわ。お里があるわけじやなし……」

「そうだよ……あの御新造も、白川さんと同じ熊本ものだもの……けど、お前……」

ときんは、想像がつかないらしく、娘の顔をまじまじみて、

「まさか離縁はなしでもあるまい……白川さんからの手紙にそんな模様はちつともないもの……」

「そりやそうでしょうよ」

とはいいながら、占いでもするような眼で火鉢の猫板に頬杖をついている。きんはこれまでもこの足の悪い娘の予感することが妙にびつたり当るので、時々わが子ながら気味の悪くなることがあつた。市子の口寄せでもみるような眼でしばらくとしの顔を見ていると、としは頬杖をはずして、

「わからないわ」

と首をふつた。

白川倫が九つになる娘の悦子と女中のよしをつれて、久須美の家の前に傳から降りたつたのはそれから一時間ばかりたつた後であつた。

取りあえず湧かしてあつた風呂に入つて、旅の塵埃を洗い落した後、倫は福島の名産だという干柿や会津塗などの外にきんにもとしにもそれぞれ似つかわしい反物を土産に持たせて、階下の茶の間へ来た。

縞ものに黒縮緬の五つ紋の羽織をどつしり着て、衣紋つきのいい撫肩の胸を少しそらせるようにして坐つている倫の様子には四、五年見ない中に、めつきり官員の奥さんらしい容態が具つていた。照りのいい黄味がかった顔色の額が稍々ひろく、厚肉の形のよい鼻を中心に眼も口もゆつくり間隔をとつて置かれていたので、神経質な印象はどこにもなかつたが、はれた眼の下におかれたように細く見ひらかれている眼には、ちようにその眼瞼を蔽いにしていろいろ

な表情の流出を、食いとめていような一種のもどかしさがあつた。白川夫婦が東京に居たころ二年近く隣家に住まつて懇意になつていながら、きんなどが倫に気の置けるところのあるのもその重たい眼ざしと崩したところのない言葉つきや動作のせいなのであつた。それは、勿体ぶつていゝとか、意地の悪いとかいうのとは違つていゝので、批難しかねるのだつたが、江戸つ子のきんに簡単にいわせれば、気のさばけな人ともいゝのだらうか。しかし若い時よりも夫の地位が重々しくなつた今では、倫のそういう堅くるしさもなかなか貫目があつて立派に見えるときは思つた。

悦子はまだのび揃わない髪をお煙草盆にゆつて、眼なれない川の眺めが珍しいらしく連子窓の方へばかり眼をやつていた。

「大そう綺麗におなりになりましたねえ」

ときんがお世辞でなしにいつたほど悦子は色が白く中高の美しい顔立ちだつた。

「お父さまによく似ていらつしやる」

ととしもいつた。ほんとうに悦子の頬の肉のうすい品のよい顔や首の長い身体つきは倫よりも白川に似ていた。倫は悦子にはこわい母親であるらしく、

「悦」

と倫が一声低くよぶと、悦子はすぐんだように母の傍へ来て坐つた。

「よく思いつて出ていらつしやいましたこと。旦那さまも県令さん同様の御威勢だといひます

から……奥さまのお心づかいも大変でござんしよう」

ときんはせかせかと煎茶をいれてすすめながらいつた。

「いいえ、もう私もお役向きのことは一向わかりませんので……」

と倫は口訥なについて、白川さんは県では大名暮らしだそうだとときんが人の噂さきにきている羽振のよい自慢話などは、總も見せなかつた。盛り場の開けた話だの、髪形の少し見ない中にちがつたことだの、新富座の芝居はどんな狂言を出しているかだの、東京を中心の世間話にしばらく花が咲いた後で倫は、

「私も、今度はゆつくり遊んで来いとゆるしが出ましてね……まあ、その中には少し用もまじつていますのですけれど……」

といつて、傍にいた悦子の髪の赤い櫛をちよつとさし直した。何げない言葉つきだつたのできんは少しも気にならなかつたが、としはやつぱり何か倫が大切な用事をもっていることを感じた。しつとりと落つてゐるまつている倫の身体に何か常でない錘が沈んでいるように見えた。

その翌日出不精なとしが、昨日の土産の礼心に悦子を観音さまの御詣りに誘うと、よしも悦子も喜んでつれ立つて出かけた。

「帰りに仲見世で絵草紙でも買つてお上げよ」

ときんは娘にいつつけて門まで送つたが、その足で二階へ上つてゆくと倫が次の間に坐つて持

つて来た葛籠から衣類を出し入れしていた。白い雲のちらばっている空が川水に映つて、倫の坐っている二間つづきの座敷も白つぱい明るさにひろびろしていた。

「まあ、早速に、御精が出ますこと」

といいながらきんが縁側に膝をつくると、倫はゆつくりした動作で着物を一枚一枚葛籠に収めながら、

「悦が大きくなつたので、あれを持つてゆくこれも持つてゆくなど申して……旅をするにもめんどろになりまして。……あの御隠居さん……いま御用はおありでしょうか」

といった。恰度膝を立てて葛籠の中へ悦子の黄八丈の袴を沈めるようにおいてる時なので倫の顔は見えなかつた。きんはもとより世間話をしようと上つて来たのであつたが、倫にそういわれると何だか上つて来たのがきまりの悪いような気分になつた。

「いいえ……奥さま何か御用でございますか」

「いえ、お忙しければ、今にも限らないのですけれど、悦が出かけておりますし……まあ、ちよつと、こちらへおいで下さいまし」

倫はやつぱりゆつたりした調子でいつて、座敷の縁に近いところへ座布団をもつて来た。

「あの……実は今度の滞在中に、是非あなたに御骨折願ひ度いことがございますのです」

「おや、何でござんしょう。私のようなものでお間にあいますことなら、何でもいたしますけれど……」

きんは勢よくいつてみたけれど、倫の行儀よく膝に手を置いて伏眼になつてゐる顔から何を語り出されるのか想像は出来なかつた。倫のゆつくりした長めの頬のはずれから口尻にかけて、うつすら微笑んでゐるらしい微かな緑が浮んでいた。

「妙なお話しなのです」

と倫はちよつと鬢の当りへ手を上げながらいつた。身だしなみのいい倫の髪の毛はいつもきれいに取上げられてゐるのだつたが倫は一筋のみだれ毛をも見苦しがつて時々髪を撫でて見る癖があつた。

何か女についてのこらししいときはその時氣づいた。白川は東京にゐるころにも女出入が多く倫が心配したことをしつてゐるので、いまのような地位になり登れば猶更そういう事柄はあるに違ひなかつた。でもそういう内情を推察したように立入るのは、都会人のエチケットに反してゐるのできんはやつぱりおぼおぼしい表情をつくつてゐた。

「何ですか、どうぞ、御遠慮なしにおつしやつて下さいましよ」

「ええ、どうぞお頼みしなければならぬことですから……」

倫の口もとにはやつぱり女面のようなほのかな笑ひが漂つてゐた。

「あの実は、小間使を一人抱えて帰り度いのでございます。年は十五から十七、八ぐらい……出来れば堅い家の娘で……縹緞のいい子でない

と困ります」

終りの言葉をいつた時口もとの微笑がはつきりして、厚い眼瞼の下で眼がその笑いと凡そふさわしくない生真面目な光を湛えた。

「ああ、なるほど……」

そういつた自分の声がいかに軽薄に聞えて、きんは下を向いた。それだけきけば先日と予感したことははつきりのみこめるのだつた。うなずくとも溜息ともつかず息を深く吸つてからきんはいつた。

「やつぱり、もうああいう御身分におなりなさんと……そういうものが要りますんでしようねえ」

「どうも……やつぱりねえ、端が承知いたしましたのでねえ」

それは嘘だつた。倫は胸の中に噴上げて来る感情を力一杯おさえつけおさえつけてゐた。

夫が妾を新しくかかえようとしてゐるのはもう一年ほど前からの計画だつた。白川にとり入つてゐる下役達は倫が酒の席などにゐるとよく、「奥さん、このくらいのお邸に、お腰元が不足していますな」とか、

「大書記官も多忙すぎますよ。ちつと変つた枕で楽寝をさせてお上げなさい」とか立入つた口をきいた。部下に甘くみられる

事の大嫌らしい白川が、妻にそういうことをいう時だけ、それらの無遠慮な男達をたしなめないのを見ると、倫には夫が彼らの口をかり

て自分に相談をかけているのだと思えた。

女にかけては放埒な白川を倫はもうこの年までによく知つてい、結婚して数年のような純な愛情は夫に持てなかつたが、それでも敏腕で男ぶりのよい白川は倫には充分魅力のある夫であつた。

細川藩の下級の武士の家に産れて維新前の混乱した秩序の間で教育も芸ごともし碌々身につけず早く結婚してしまつた倫には今の夫の位置にふさわしく交際や家政をとりさばいてゆくのはなかなかの仕事だつた。でも気象の烈しい倫は夫と家とを大切に思う道徳できびしく自分を縛つて、誰れからも非をうたれないように油断なく家事に心をつかつて暮らしていた。倫とすれば一ぱいの愛情と智慧が夫を中心とした白川家の生活につめこまれていたのである。

それだけに倫は年よりもふけていた。美人ではないが十人並みの縹緲で、身だしなみもよい方だつたから、特に年寄じみているわけではなかつたが、性来の堅い気性なのが責任をいつも重く荷なつていたので、年増盛りの女に見られる熱れた肉感など棄にしたくもなく、白川からみれば十以上も若い筈の妻が時に姉のように見えて驚かされることがあつた。もつとも倫のそうした厚い表皮の下には熱い血が油火のように強く燃えていることも白川は誰れよりも知つていた。白川はそういう倫のおさえた情熱にほてりを感じるときがあつた。それは明らかに自分達が産れ育つた中九州の照りつける容赦のない夏

の陽を連想させた。まだ山形に勤めているころ夏の夜どうしたことが夫婦の寝ている蚊帳の中に小さい蛇が入つていたことがあつた。ふとめざめて白川は浴衣の胸のあたりに、冷りと水のような感じをうけた。おかしいと思つて手やるとその冷たさがするすると滑り出した。

白川が声を立てて飛び起きると、倫もおどろいて身を起した。枕もとの行燈を引きよせて火皿を向けると、夫の肩に黒い紐のようなものがぬらりと光つてたれていた……

「蛇!」

と白川が叫んだのと、倫の手がのびて夢中にその生きている紐を掴んだのと一緒だつた。

倫は白川ともつれるように縁へ出て開けてあつた雨戸から庭にそれを投げた。倫の身体はふるえていたが、寝間着の衿のはだけた胸にもあらわにしていた手にも、いつもの倫が封じて見せまゐとしていた生々しさが逞しく匂つていた。強気な白川は、

「何故捨てて……殺してやるのに……」

と倫を叱つたが倫の情熱を感じながら、白川にはもうそのころから倫が愛情の対象にはなりにくくなつていた。自分の強気の一枚上をゆく強さが倫にあるのが、けぶたくなじめないのだつた。

「妾といういやに表立つが、お前にも小間使だ……よく仕込んでお前が交際で外へ出るような時にも安心して委せて置ける性質のいい若い女がうちにいるのいいじゃないか。だからお

れは若者などうちへ入れて風儀をわるくしたくない。お前を信用してお前に一切委せるから、若い……出来るならおほこな娘がいい、そういうのをお前の眼鏡で探して来てくれ。費用はこの中から使つてくれ」

そういつて白川は、倫のおどろいた程大枚の金を目の前に置いた。

いままで他人の口からいわれていた時はきかぬ振で通していた倫も、白川からその口をきかれるともうどうすることも出来なかつた。自分がこの役目を断れば夫は恐らく勝手に自分で選んだ女をうちへ引入れるであらう。「お前の選択に委せる」といふ言葉の中には白川が家の為に倫の立場を重くみている信頼が含まれているのである。その奇妙な信頼を重く胸にしまつて、倫は東京見物を楽しんでいる悦びやよしをつれ人力車にゆられ通して久須美の家まで運ばれて来たのだつた。

「ようございませう。私の懇意な女の小間物屋にそういう口入れをよくする人がござんすから、早速、頼んで見ましよう」

きんは倫の心の奥の重さについていい工合にふれて来ず事務的に話を運んで行つた。蔵前の札差の分れたという家に産れて、旧幕時代の大きな町人や武家の気風をしつているきんには、男は出世すれば妾の一人や二人持つのは不思議でもなんでもなかつた。かえつて家の盛つて行くあらわれのようである奥さんも嫉妬半分、少しは得意も

交っているだろうぐらにきんは想像していた。それゆえ夜になつて、娘と二人床へ入つてから、まだ氣を置くように声をひそめて、ちらちら二階へ眼を走らせながら、そのことをと話しした時も、

「氣の毒だねえ」

という娘の沈んだ声にむしろびつくりしたくらいだつた。

「あの御新造……お母さんはしばらく見ない中に貫目がついて立派になつたというけど、私には苦勞の貫目みたいに見えるわ。うちの格子があいて、入つて来た顔を見た時、私、ああと思つたもの……」

「福のある人には、それだけの苦勞もついてまわるものさ……」

ときんはこともなげにいつた。

「まあ、何しろ、性のしれた、氣質のいい娘を世話して上げたいものだ。旦那は生娘がなければ、半玉でもいい、すれていない女ならいいつていいなさつたそうだけれど……」

どの部屋もひんやり静まつて大寺の庫裏のような県庁の官舎から出て来ると、隅田川のひろい水の眺めが眼の前にあつて、船の櫓を押しきる音や川波のゆるるそよぎが一日中耳についているこの家の二階はひどく陽気で幼い悦子の氣に入つた。よしが用をしている間悦子は裏木戸から棧橋へ出て足もとの杣をゆすつている水のゆるやかな動きを眺めたり、忙しそうに漕

ぎすぎてゆく荷舟の船頭の威勢のよいかけ声に耳をとられたりしている。そんな時、連子格子の間からとしの青白い顔がのぞいて、

「お嬢ちゃん、氣をつけてよ、落ちちやいやです」

と声をかける。今日もきんは倫と一緒に出かけているのである。

「大丈夫よ」

と悦子は、ふり向いてにつと笑う。年より大人びてみえる細面の整つた顔に、紅の切れをかけた小さい鬘が可愛かつた。

「お嬢ちゃん、いいものを上げるからいらつしやい」

「ええ」

と素直にいつて、悦子は紅い縞のたもとをゆらゆらさせて、窓の下へ来た。連子の下の狭い土を軟かくならして、きんの丹精している朝顔が五、六本細い竹にからみついて蔓をのばしていた。外からみると窓の中のとしの顔もひろげている縫物も悦子にはうちでみるのと別のように見えた。としは連子の間から瘦せた手を出して指先きにつまんでいる紅絹の小さいくくり猿を悦子の眼の前でふらふらふつてみせた。

「綺麗ねえ」

と悦子は連子に両手でつかまつて、うれしそうに糸の先の小さい猿をみている。その顔があどけなくほころびているのでとしは、この子はお母さんがいないでも淋しがらないと思い、ひとりでうなずくのだった。

「お母さま、どこへいらしたの」

くくり猿の糸をふらふらさせている悦子にとはきいてみる。

「御用……」

と悦子ははつきりいう。

「お嬢さん、お母さまいらつしやらないと淋しいでしょう」

「ええ……」

といつたが、眼は活々冴えていて、

「でもよしやがいるから……」

「ああ、そうね、およしさんがいますものね」ととしはうなずいてみせた。

「お国にいらしつてもお母さま御用が多いの？」

「ええ」

と又、悦子ははつきりいつた。

「お客さまがあるの……」

「大変ねえ、お父さまはお出かけが多くつて？」

「ええ、昼間はずつと県庁よ。夜もお招かれがあつたり、おうちへお客が来たり、私、お父さまと一日あわないことよくあるの……」

「そう……女中さんは今幾人おいでなの」

「三人……よしやとせきやと、きみやよ、それに馬丁と書生……」

「まあまあ大変な御家内ね。それではお母さまもお忙しい筈ですわ」

としは針の目をとめて微笑んだ。この滞在の間に倫が探し出してつれてゆく女のこと頭

浮び、それは悦子の境遇にも何か変化を与えるかもしれないように想像された。

としと悦子が話しかつてゐるころ、倫ときんは柳橋の卯月という船宿の二階で男芸者の善好を相手に話していた。

倫を主人にして、きんはすつかりへりくだつてゐた。善好は旗本崩れだけにさばけた中にも賤しいところのないきりりとした男で昔なじみのきんとは商売をはなれた口のきき方だつた。「そうですね、お話をうかがうと、なかなか難かしいね。まあ、もう少しすると、四、五人。縹緞のいい子が来ますがね……」

ちよつともち扱つた形に、善好は銀の細身の煙管をくると指のさきでまわした。腹の中では、どこの国に妾を本妻にさがせる奴があるもんか、国ものはこれだからいやだと舌うちしているのだつたが、向いあつてゐる倫の権高いというでもなく、愛嬌があるというでもなく、どこに変わった一節もないなりに、嘲弄したり、しやれのめしたりする事の出来ない窮屈なところが、善好の中に残つてゐる伝統的な矜持にどこか合うのだつた。

「私達の眼でみていいと思つても殿方のこのみがありますものねえ、奥さま」

いける口のきんはさされた猪口を善好にかえしながら倫の方をみた。

「いや、私なんぞのこのみも余り当てにはなりませんぜ。このごろの前髪を描いて切つて女唐

傘をさした女の学生なんぞ……どうもね」

「いやですよ、細井さん、そんな、らしやめんみたいなのを探しちやいらつしやらないんですよ。台地の半玉ならいまだつて細井さんのお好みの、英泉だちのいい女もありましようにさ」

「それがね、私やどうも、口が悪くつて若い娘には憎まれもんなんでね」

そういつた時、中二階の梯子をとんとと昇つて来る足音がして、

「今晚は……」

という入れまじつた声。

姐さん株の老妓につれられた雛妓が四、五人、薬玉のようにかたまつて入つて来た。

「お待ちなすつて？」

と善好にいいながら老妓は女中から三味線をうけとつて、三下りに合せはじめた。

地方の官員の奥さんが東京みやげに美しいお酌の手踊をみたいという触込みなので、昼座敷なのに雛妓達は牡丹のように着飾つていた。

お座つきがすむと二人ずつかわりあつて雛妓が踊りはじめた。踊つていないのは倫の傍へ来て、料理を並べかえたり酌をしたりした。倫は酒は嫌いだったが手持ちぶさたなので、盃をふくみながら、踊を見たり傍で善好やきんに話している雛妓の様子を見たりしていた。

年は皆十四、五であらうか。中に二人は梅、桜といったいほど美しかったが、一人は踊つてゐる時あらわになると、手が細くくろずんでい

て貧相だつたし、一人はつんと高い鼻の横に笑う時による筋がいかに酷薄そうで青鸞の感じだつた。あんな娘がうちへ入つて、だんだん大きくなつていつたらと思うだけで倫はさむけ立ち、この選択を自分に委せた良人に感謝したい気持ちになつた。

雛妓達が帰つていつた後、倫がきんにその話をすると善好がひきとつて、

「いや、奥さんはお目が高い」といつた。

きんはこの間から倫の相手になつて女の鑑定をしてゐるのだつたが、倫の眼の細かくて鋭いのは、感心するのを通りこしてこわいように思う時があつた。不断のつきあいに、うるさく人の噂などしたことがなく、はりあいのないような倫が今のような場合になると女同士目の目とどかね隔々まで、ゆきわたつた批評をしてきんを驚かすのだつた。

この前、女小間物屋のおしげが目見えにつれて来た本所の飴屋の妹ぶんだという娘なども、眼鼻立ちが揃つていて、口のきき方もおとなしく、きんならばすぐ手をうつところだつたが、倫は首をかしげて、

「あの娘は十六だといひましたが、十八にはなつていますね、そうして……生娘ではないと思ひますよ」

といいにくそうにいつた。まさかと思ひながら、精しく問いただすと姉婿の職人と情事のあることがわかつた。

「奥さんはまあどうしてそんなにお目がきくんでしょう」

ときんが感嘆の目をみはると、倫は苦しうに下を向いて、

「私だつて昔からこんなじやありませんでしたけれど……」

といつて自分を歎くような溜息をついた。白川のいろいろな情事を見ている中に倫の中には真実を見破る目が具つて来ているらしかった。深く人間の執着や煩惱について考えることの面倒なきんも倫と一緒に妾を探している間に娘のとしのいつた倫の「苦勞の貫目」が少しずつわかつて来るようであつた。

倫が夜机のそばに坐つて、何枚も美しい女の写真を眺めていると、悦子はそつと傍へよつてのぞき込んだ。

「綺麗なひとねえ。お母さま、誰なの？」

悦子が髪の赤い布を傾けてきくと、倫はそれには答えず二、三枚の写真を渡して、

「悦、どの人が好き？」

ときいた。

「そうねえ」

と悦子は扇形にひろげてちよつと写真を見たが、

子供らしい一本調子で、

「これ」

といつて、真中のをさした。白いバックに桃割をつめて結つた十四、五の少女の堅く手を揃えた半身だつた。せまつた富士額に黒い珠を半分

つつんだような眼立つて大きい瞳が美しく悦子の心にうつつた。

「そう……お前も、これ」

と倫はびつくりしたようにいつて、もう一度その写真をとつて眺めた。

「それ、誰れよう、お母さま」

と悦子がきくと倫は写真を重ねて、

「誰でもいいの……今にわかります」

と静かにいつた。

その写真は二、三日前柳橋の桜川善好から届けられたのだつた。

倫の選択が難かしいので、きんの家へ来てからもう一か月以上になるのに、未だに白川に通知するほどの相手は見つからないのだつた。倫は逆々しい字でいく度か夫に手紙を出し、お氣に入らぬ者をつれて行くようなことは万々しなと申しわけしていた。白川からその度に急がぬでもよいから、充分に氣を遣つてくれという返事が来た。それでも、梅雨が晴れてもう盆を前にするころになると、倫の氣もせいて来た。夫ばかりでなく留守の家の取締らぬ様子が氣になつてならないのである。

そこへ善好から新しい話が来た。

きんのきいてきたところによると、これなら白川の奥さんのお氣に入るに違いないといふことだつた。

石町の竹の皮屋の娘で、名を須賀という。年が十五で踊は西川常磐津も子供の時から習つて

いる。おさらいなどへ出ると幼いころから評判される繚繚よしであつた。母親も当主の兄も評判のよい人柄なのであるが、この二、三年店の方に悪い奉公人がいて身代がまわつてしまつたので、今では店を始末するか、娘を芸者にでも出すかといふところまでさしせまつている。お妾にとは親も考えていなかつたが、踊の師匠が善好と懇意な仲で白川の話をきいたので、そういうお邸なら、強いて泥水稼業に沈めるよりは、当人の出世にもなることだから話して見ようといふことになつた。

「あの子なら氣質もおとなしいし、第一東京のものには珍らしく肌が真つ白でお風呂やに行つても、子供が傍へよつてみるくらいですもの……」

と西川の師匠はいつた。

ちようど二、三日中に月ざらいがあつて、その須賀という娘が、「梅の春」を踊るというので、倫ときんは善好の案内で師匠のうちへ出向いた。おさらいを見せて貰いに来た風にして、よそながら須賀を見ようというのである。石町の問屋町の間にはさまつた露地の中に師匠のうちはあつた。間口は狭かつたが二階には舞台があつて、倫達が上つて行つた時、師匠は三味線をひいて小さい女の子が「五郎」を踊つていた。善好をみると三味線を持つたまま師匠は眼でうなづいてちよつと笑つた。口の中がお齒黒で暗く、それが生々した眼を一層水々させていた。大体時間をはかつて来たので、須賀も来ている

筈だと三人はそれとなく狭い部屋にござやごちやくつづいて見物している娘達に眼を配つた。どれも浴衣がけに、赤の入った帯をしめていたが、端の方に坐つて、舞台に無心に見入っている娘の際立つた美しさがすぐそれと解つた。皆が団扇を動かしている中にその娘は大して暑そうにもなくきちんとしていた。十五にしては大柄な身体つきでたしかに写真でみた顔立ちだったが、奉書紙のように肌が白いのと髪が暑くしいほど多くなり色の艶をもつて白い顔をふちどつてゐるので、眉や眼が一きわくつきりして舞台化粧でもしているように、派手に眼立つのだった。

驚かされた感じで倫は須賀の顔へ眼を向けていた。美しいというだけで、そこには精神の欠片がひらめき出しているような表情はなかつた。ただ濁つていない感じだけはたしかだった。友達と話している声が割に低く、伏し目に何かいっては静かに眼をみはつて、相手のいうことをきいている様子が、自然でおとなしやかだった。五郎がすむと、師匠は三味線を地弾きにゆづつて、

「この次、お須賀さん」といいながら、立つて、倫達のいるところへ来た。

案の定倫の眼をつけていた娘が立上つて裾を両手に持つたまま少しこむような格好で舞台の方へ歩いて行つた。

「あの子でござんすよ」

と師匠は三味線が聞え出すと、すぐ、倫とさんの方へ如才なく話しかけた。

「そりやおとなしい質で、あれなら奥さまがお仕込みになるにはお楽だと思ひますよ」

あんな派手な顔立ちの癖に気分はめいつた方で、その為だに覚えはいひ癖に「踊」は一息き引立たないところがある。当人も人前で芸を見せたりすることはあんまり好きでなく、親達の道楽で遊芸は身につけたようなものの、浮いた稼業などになつても、自分のような引込み思案ではとても駄目だろうといつてゐること、こんな人氣の多い町中はほんとうは自分の性にはあわないので、青い田んぼや川のひろびろ眺められる閑静なところに住んだら、さぞ気持ちかはれる踊りの手振を眺めている間に、師匠はぼつぼつ話してくれた。須賀の母親が子煩悩で師匠からちよつと白川の話を耳に入れた時も、福島へゆくのだといつたら、そんな遠いところはといつて急に泣き出したことだの、もしお氣に入つて使つていただくにしても、奥さまのお氣合一つで娘の先きが案じられるから是非一度お眼にかかつていろいろお話ししなければといつてゐることだの、きんと善好が主に相手になつてゐる倫は、須賀の踊っている様子に眼をやつてゐるのだつたが、耳に入つて来る話の中で、母親の慈愛の深そうな様子など今までのどの話よりもしつくり溶けこめるのだつた。そういう母親の娘だつたら、悪くすれてゐるところもないであ

ろうし、福島へつれていつて自分が何かと教えてゆくにも素直ではないかと思われた。

踊を見ても、素人の倫には細かいことはわからなかつたが、眼づかいや手足の働きに何か上からおさえられてゐるような重たさがあつて、縹緞のよい割に、はなばなしくなかつた。それもよいと倫は思つた。自分の家の中へ闖入して来る女性に対して、倫は殆ど無意識の中に、鮮明な強い性格を嫌つていた。顔形だけ派手に水々しく、心持ちの沈んだおずおずした娘……それは倫には理想に近い「陰の女」のタイプだった。

「よきそうじやござんせんか」

と帰り道に露地を出るとすぐ善好がいつた。倫と話す時善好は暫間らしい態度でゐることが出来なかつた。氣取つてゐるのでなく小旗本の次男坊の口調が自然に出たし、倫も善好を「細井さん」として話す方が話し易かつた。

「ありや芸者向きじやありませんよ。ああいう陰気な氣分の子は売れない」

「そうでしょうかねえ、あんなに綺麗でも……」

ときんがきいた。

「縹緞ばかりじや行きませんよ。しかし奥さん、ああいう質の女は十年もすると、いい加減芯がしつかりして来ますからね。それだけお氣をつけなさいましよ」

「そりやそうかもしれせん」

倫は、白刃にひやりとふれたように身体が粟だつた。さつき須賀の踊をみている間にもその戦慄は時々倫を襲つたのだつた。

舞台の上で顔を傾けたり、身をそらしたり、色々々艶めかしい姿態をつくつて、主に男女の情事を表現している須賀の実際には半分子供のような無邪気な肉体を眺めていると、倫にはこの未熟な娘が、自分の邸へ連れて行かれ、あの女をなすけることの上手な夫の手で、どんな風に手ならされ、交つてゆくか、思わず眼を閉じ息をつめた眼の前に夫と須賀のからみあつた四肢が浮び、頭へ血が上つて来て、倫は悪夢をはらいのけるように舞つている娘の運命については、切ない同情が浮び、同時に嫉妬が熱い急流になつて全身を駆けめぐつた。

氣に入つた女のなかつた間はそれを探す焦りで空白だつた心に突然断食を解かれたようにひもじさが殺到して来た。夫が外の女のものになるということを、公然と見とめなければならぬ辛さが、じりじりと身を焼くのだつた。こうした苦しさを妻に与えて、平氣でいる夫は地獄の鬼のように無情に倫には思われた。夫を天として仕えることを自分の生活の信条にしている倫にとつては夫の無理に背くことは自分を同時に失うことだつたし、そういう信条以上に倫は無情な夫を愛していた。そして、倫は白川から離れようとはゆめにも思わなかつた。

白川の地位や財産、悦子や国に預けてある長男の道雅の将来、それらが倫の絆になつてゐることはたしかだつたが、その外にも倫はどんな犠牲によつても、自分というものの内心の欲望や情緒を底の底まで夫に解つて貰い度いのだつた。それは倫としてはどうしても白川以外に解くことの出来ない情願なのである。

自分と夫との間にもう一人、小娘の須賀が割込んで来ることを想像すると、倫は今までもどうしても自分の声がほんとうに聞えてくれなかつた夫が一層、遠いところへ歩みさつてゆくように思われるのだつた。

倫は夫に須賀の写真を送つて、その承知の返事を受取つた晩、夫を殺すゆめをみて、わが声に驚いて眼ざめた。

夫を締めた手の力がさめた後まだ握りしめた拳にまざまざと残つていて、倫はわが身が恐ろしく床の上に起上つてしばらく胸を抱いていた。行燈の細い燈心の光りに、隣りの床にぐつすり寝入つてゐる悦子のやわらかくふくらんだ片寝の頬が、ほんのり白く浮んでゐる。この子は起きてゐる時は、割に大人びてゐるだけに、寝顔のあどけなさが倫には可愛くおもわれるのだつた。甘く育ててはならぬといつも心に張をもつてゐるので、悦子は母よりも女中や悪意な人になじんで、他から可愛がられる娘だつたが、こうした深夜に苦しい夢からさめた倫が油汗を総身に流しながら、焼けつく沙漠の中の唯一つの泉のように涙ぐんで眺め入つてゐる眼ざしを

悦子は夢にも知らないのである。

須賀が母親と一緒に久須美の家へはじめて挨拶に来た時、悦子は母やきんから一緒に福島へつれてゆく人だといわれて、須賀の美しさに子供心を喜ばされたらしかつた。

「綺麗ねえ。この間の写真の人ね。あの人おうちで何するの？」

と悦子がきくと、母はちよつと眼を避けるようにして、

「お父さまの御用をするのよ」

といつた。

「じゃあ、せきやと同じ？」

「ええ、まあね」

それ以上きくと母に叱られそうなので悦子は黙つてゐた。倫に堅く口どめされてゐるので、よしも悦子に須賀のことは何にも言わなかつた。

倫は複雑な感情を胸の中に包んで、須賀の母親とも対談しなければならなかつた。須賀に似ないで鼻が低く頬の丸い小柄な母親は、金の為と思つてゐるらしく、倫を唯一人の拠所よきどころに思つて娘の身体からだの丈夫でないことや、まだ本当の女にもなつてゐないことまでうち割つて話すのだつた。

「鷹揚たかやうでしつかりしたい奥さまで、私もやつと安心いたしました。お須賀がさきさき旦那様のお氣に入らないことがあつても、奥さまがきつと何とかしてやるとおつしやつて下さいませ」

倫を前に置いてきんに心から頼もしそうに語っている人のよい須賀の母親に対して、正直な倫はやつぱりどんな事があつても須賀を不幸な眼にあわせてはならぬと心の中で誓つていた。

夫の愛情を奪う筈の女の為に将来の保護まで考へてやらねばならぬ。矛盾した運命を担つて自分の倫は、時折淋しく笑つてみることがあつた。そういう時、倫は自分からまりついてゐる絆から、ほんの一時ぬけ出て、そういう自分や夫や悦子や須賀を同じような眼で眺める余裕が出来るのだつた。

盆が過ぎて二、三日した朝、倫の一行は新しく須賀を加えた四台の俵で久須美の家から去つて行つた。

紫の緋の透綾に博多の帯をしめた須賀はもう悦子にまつわられて途中まで相乗りで出かけた。大きい花と小さい花の咲きこぼれた様な俵を見送つて、きんの親子は茶の間に帰つた。

「お嬢さんの氣にも入つたようだし……まあ、まあよかつた」

きんがかけていたたすきを取つてたたみなながら娘をみると、としは足をひいて肘掛窓の下へ行き、仕事をひろげながら、

「白川さんという人も罪人なえ」といつた。

「私、奥さんとお嬢さんとお須賀さんと一人ずつ可哀そうで、涙が出た……」

そういつて、としは指の先きで、ちよつと眼をおさえ、笥台を膝の下に挿みこんだ。

青い葡萄

昔は本陣だつた。今でも宇都宮の町一番の旅館でめばしい客の泊る上州屋の表二階の縁近く青簾を涼しく巻上げて、碁盤に対座している客があつた。上座なのは隣県福島県の県庁で大書記官を勤めている白川行友、相手は随行して来た属官の小野である。白川は藩閥政府の強力な推進力として当時鬼県令と言へば泣く子も黙ると県民から怖れられた川島通明の股肱で、近ごろ頻発する自由民権運動の弾圧にも川島攻勢の急先鋒として活躍している。

すつきり長い首に水色の衿を細くのぞかせた越後上布の帷子が涼しげにふくらむほど瘦せた眼立つ白川は、中高の細面に常は意識して柔和に霞ませているものの、折々きらりと閃く強い眼の光がモノメニャクな性格の片鱗を窺わせる。しかしちよつと見には、鬼県令の片腕とは見えぬ清楚な風采の紳士である。

「まだお着きではありませんか」

一面囲み終つた黒い碁石を手もとにかきよせながら属官の小野が言つた。白川は銀煙管できざみを一吸いしてから、ゆつくり帯の間の金時計をぬき出して、

「かれこれ五時だから、もう着くだろう……町のはずれまでは、馬丁が行つてゐるから間違う筈はない」

と半分一人言のように言つた。落ちついて見せ

てはいるが、心待ちしている証拠に「もう一面」とは言わない。小野は碁盤を片よせてあとの畳に塵がないかと眼を配つた。白川の潔癖を知つてゐるからである。

白川は栃木県庁との連絡事務を名にしてこの町へ昨日出張して来たが、実は東京へ三月あまりやつてあつた妻と娘の帰るのをここで待受けているのである。小野は一緒に来た白川の馬丁から白川がわざわざ宇都宮まで出て来た目的が古女房や幼い娘の迎えだけでないことを既にきかされている。

「素晴らしい別嬪だつてこつてすぜ。何せ、奥さんをわざわざ東京へやつて、見立てさせたというから、うちの旦那も風変わりさね」と馬丁は呆れた顔をして珍しそうに話した。

「白川君もあ遊ぶんじや妾を二人二人うちに置く方が所帯のためによからう」と川島県令が言つたとか。福島県の町の某という芸者が白川の持物になるという噂だとか、これまでちよくよく耳には入つてはいたが、東京へ奥さんが出かけて、その眼鏡で妾を連れて来るという話には馬丁同様氣の小さい小野はたまげたのである。大体あの堅苦しい白川の奥さんが広い東京をどう歩きまわつて妾になる女を探し出せたものであろう。出世する男を夫に持つと、女にも自分などの想像もつかぬ才覚が産れて来るものなのであらうか。

丁度その時、玄関の方で俵のとまる氣配がして客を迎える男女の声が廊下を走る足音と一緒に